

## 時慶記のキリシタン(番外編 3)

### パウロ意安—吉田宗桂の謎

島野達雄

前稿「時慶記のキリシタン(7)道三流医術の系譜」では、姉崎正治『切支丹伝道の興廃』(昭和 5 年)の「ビレラ神父が偶然、堺で出会った山口出身の医師 **Paulo Yesan** (パウロ・エサン) は、パウロ意安すなわち初代意安・吉田宗桂ではないか」という仮説を紹介した<sup>1</sup>。

ここでは、姉崎正治博士の説に対し、いずれも一次史料とは言い難いが、フロイス『日本史』をはじめとする西欧側史料と、『寛永諸家系図伝』、『角倉源流系図稿』、『寛政重修諸家譜』<sup>2</sup>などの日本側史料との比較をおこない、**Paulo Yesan** (以下、パウロ・エサンと表記) が吉田宗桂と考えられる可能性を検討したい。

当然のことながら、禁制下の日本側史料にキリシタンに関する記述は一切ない。

#### 1. 意安とよばれた吉田宗桂

吉田宗桂(永正 7 年(1510) - 元龜 3 年(1572))<sup>3</sup>は、吉田角倉家の一族のなかで初めて意安と呼ばれた医師であり、天龍寺の僧策彦と二度、明に渡ったことで知られている。

宗桂の長男の角倉了以には、寛永 6 年(1629) 11 月林羅山撰文の碑銘があり、また明治 16 年 10 月刊行の『先哲叢談続編』以後、文部省国定教科書に掲載されたことから、河川の開削などの事績が知られるようになったが、その父・宗桂の伝記は多くの謎に包まれている。

はじめに、吉田宗桂の二回の渡明と大内氏とくに大内義隆との関係を明らかにするため、キリスト教布教やパウロ・エサンが登場した経緯はしばらく置き、宗桂とともに渡明した策彦が残した記録に目を向けてみよう。

『寛永諸家系図伝』第十五<sup>4</sup>には、宗桂の短い伝記がある。

意安。はじめて医をもつて名をあらはし、日華子(じつかし)と号す。五代(唐と宋の間)の陳日華、宋の開宝年中(968-976)に諸家の本草を撰し、寒温をわかち性味(しようみ)をわきまふ。宗桂も又よく和薬を弁知す。故に世人これを称して別号とす。

後年の『寛政重修諸家譜』巻 427 は、宗桂の法名として「日華」をあげている。

つづいて、

天文八年、入明の使僧天龍寺の長老策彦にともなひて大明に渡れり。明人、宗桂が診治の神察あるをもつて意安と称す。是(これ)医は意なりといふ義を取てなり。梅崖、称意の二大字を書してをくれり。

と、明の国で宗桂が意安と呼ばれたこと、これには医は意(こころ)なりという意味が込められていること、吉田角倉家の図書館、称意館<sup>5</sup>の命名者は、大陸の玄関口、寧波(ねいは。ニンポー)近郊に住む書家・梅崖<sup>6</sup>(梅厓、方梅崖、芳梅崖とも)であることを言っている。

天龍寺の策彦周良が記した渡明の記録『策彦和尚入明記』<sup>7</sup>(国会図書館デジタルコレク

ション. 全文検索可能. 以下『入明記』によると, 天文8年(1539)7月19日「晩景(夕方)宗桂帰館」とあって, 翌々日の21日に「梅崖来謁」と, 梅崖が策彦一行の宿舎をたずねている. 宗桂が一行を代表してまず19日に梅崖を訪問したのであろう. ここから宗桂は, 多少なりとも中国語が話せた, と想像できる.

梅崖は, 寧波に滞在している策彦一行を何度かたずねている<sup>8</sup>.

ただし, 「称意」で検索しても『入明記』などの史料はヒットせず, 梅崖が宗桂にこの二大字を書いて贈ったかどうかは判然としない<sup>9</sup>.

なお, 日本で宗桂を意庵(意安)と呼んだ最初の記録は, おそらく『言継卿記』天文20年(1551)正月26日条の「従入江殿日々御使被下, 福昌庵無御心元之由有之, 医者意庵可被下之由有之」であろう. これは宗桂の再渡(二度目の渡明)から帰国した後の記事である.

## 2. 搭乗した3号船の漂流

3隻で赴いた初渡(最初の渡明)は, 初めから波瀾に満ちていた.

『入明記』は, 天文7年(1538)7月朔(ついたち)の「去月二十六日, 自五島奈留, 回帰棹. 今日申刻, 到博多著岸」から始まる.

意識すると, 「ひと月前の6月26日, 順風が吹かないので, 大陸への中継地点である五島列島の奈留島から戻ることにし, 今日午後4時頃, 博多に着岸した」となる. この頃, 半年や一年をかけて順風を待つのは, よくあったようである.

牧田諦亮『策彦入明記の研究』によれば, 翌天文8年(1539)3月ふたたび奈留島に行き, 宗桂が乗っていたと思われる3号船は策彦らの1・2号船より遅れて天文8年5月3日に奈留島を出帆したが, 風に流されて朝鮮(高麗)まで流され, ようやく5月20日に寧波の外港, 定海港で本隊と合流. 3隻が寧波に着岸したのは, 5月22日のことであった<sup>10</sup>.

『入明記』では, 宗桂は, 実名の宗桂のほかに桂侍者(天文8.2.5), 桂(天文10.5.3), 桂子(天文10.7.13)などと呼ばれている. 寧波着岸後, 策彦は従僧の三英<sup>11</sup>と(おそらく中国語ができた)宗桂を携え, 観光地の月湖を見物(天文8.6.9)したり, 有名な「蘇針」を売る店を訪問(天文8.11.17)したりしている.

## 3. 朝貢貿易の実態

その後, 中国側との折衝を何度も重ね, 天文9年(1540)5月9日になって, 馬やロバに乗って代表五十人が禁裏に入り, 皇帝に拝謁を賜った.

代表団に宗桂が含まれていたかは定かではない. 侍者と呼ばれた宗桂が正使や副使の侍医であったという証拠はない. 明人から「意安」と呼ばれた宗桂が, 船中や北京への行き帰りに医療行為をおこなった, という記録も残っていない. 『寛政重修諸家譜』にある「明帝の病が宗桂の薬で平癒した」という記録も『明史』や『明史稿』などには残っていない.

『寛永諸家系図伝』は宗桂の伝記を次のように結ぶ.

天文十六年, 信使の僧策彦と共にまた大明にあそぶ. 時に明の帝王に薬を献じて, 医名

を異朝にあらはし、おほく方書をたづさへて帰朝す。是よりこのかた弟子（ていし）ますますすすみて、をのづから一家をなす。かるがゆへに後裔（こうえい）意安をもつて号とす。元龜三年十月二十日に死す。

この時代の遣明船がおこなった、將軍や大名が明の皇帝に臣従の礼をとる「朝貢」は、じつは名ばかりのもので、要は進貢品を明の朝廷に買い上げてもらい代金を受け取る、という交易によって利潤をあげることを主目的としていた。

朝貢貿易であるので、献上品（実は貿易品）のなかに薬材・薬品があった可能性はある。「明の帝王に薬を献じて」は、まんざらウソとは言えないであろう。

「おほく方書をたづさへて帰朝す」は、下浦康邦『吉田角倉家の研究』（平成 11 年近畿和算ゼミナール報告集第 3 集）所収の「吉田称意館旧蔵書目録」によって、多くの医書を持って帰ったことが確かめられる<sup>12</sup>。

#### 4. 『医方大成論』の講義・『言継卿記』の記述

天文 16 年（1547）の再渡（二度目の渡明）は、2 月 21 日に 4 隻で山口を出発した。

北京進貢を終え、寧波にもどり、天文 18 年（1549）1 月 16 日には、帰路についた。

このあと、『入明記』の記録は極端に簡略化され、宗桂の記事は登場しない。

『策彦入明記の研究』の著者、牧田諦亮は、策彦らが山口に帰着した日はおそらく翌天文 19 年（1550）6 月 9 日であろう、と推定している<sup>13</sup>。

けれども宗桂は、策彦らより一足早く帰国したと考えられる。

なぜなら、『言継卿記』によれば、宗桂は天文 19 年（1550）閏 5 月 3 日から同月 29 日まで、11 回にわたり一条邸で『医方大成論』<sup>14</sup>を公家衆に講義しているからである<sup>15</sup>。

この講義は、宗桂の帰朝報告会を兼ねていたのであろう。

その 10 年前、『入明記』の天文 9 年（1540）2 月 5 日条に「聞桂侍者著岸于遠崎之事」とある。桂侍者つまり宗桂が遠崎（山口県柳井市遠崎）に着いたという情報を初渡のさ中の策彦は中国で得ている。この日付以降の『入明記』に宗桂は何度も登場するので、誤情報であることは明らかだが、天文 9 年が天文 19 年の誤まりであれば<sup>16</sup>、宗桂は天文 19 年 2 月 5 日以前に山口にもどったことになる。

なお、『言継卿記』永禄 6 年（1563）7 月 15 日条には「高辻、安禅寺殿、**桂蔵主**、薄等へ蓮飯、鈴一對宛送之」、永禄 13 年（1570）正月 20 日条には「次大典侍殿御局へ参、玉泉院、持明院、大祥寺殿久首座、**桂蔵主**、昌蔵主等、御酒有之」とある。

山科言継はこのように宗桂（桂蔵主<sup>17</sup>）との日常的な交際を記述しており、少なくとも永禄 6 年と永禄 13 年には、宗桂は再渡から帰国して京都にいた、と判断できる。

#### 5. 宗桂は大内氏の典医だったか

『入明記』の天文 8 年（1539）8 月 11 日条で、策彦は、それまでの人生を振り返り、「近年管領桓公（室町幕府 31 代管領・細川高国（1484-1531））棄世。京師騷擾。鮮有治日。是

故天文六祀春仲，依防城府君，府君命以入唐之事」と、天文6年（1537）仲春に周防国主・大内義隆（1507-1551）から渡明を命じられた、としている。

初渡のあと天文10年（1541）9月16日には、義隆は早くも再渡を策彦に命じている<sup>18</sup>。

宗桂、策彦らの二度の渡明は、現代風に言えば、大内義隆がプロデュースした。

『入明記』の天文9年（1540）8月19日条には、初渡の北京からの帰路、蘇州滞在中に「収書担子一個，[割注：桂价．防太守へ進物用．銀六匁二分]」とある。

ここでも宗桂の中国語の能力が活かされたのであろう。策彦は、宗桂を仲介にして（牧田諦亮は「宗桂の見立てで」）、周防の太守、大内義隆への贈り物に、ひと括りの書担子（書籍の荷物？）を銀6匁2分で買っている。

策彦も宗桂も、渡明という一時的なものとせよ、「義隆に仕えた」と言って間違いはないであろう。

## 6. 初渡・再渡の遣明船の資金を提供？

『寛永諸家系図伝』には、宗桂の曾祖父・徳春は室町幕府第3代将軍足利義満に謁し、のち第4代義持に仕えたとある。宗桂の祖父・宗林（宗臨）は第8代義政に仕えた。

『寛政重修諸家譜』巻427によれば、宗桂の父・吉田宗忠（1491-1565）は、酒屋・土倉を営み、「吉田角倉家の巨富の基礎を築いた一世の富商」<sup>19</sup>であり、第10代義植（よしたね。一度目の将軍在位は1490-1495。二度目の在位は1508-1522）につかえ、侍医となった。

この第10代義植は「流れ公方（くぼう）」の異名をとり、一度目と二度目の将軍在位のあいだに、十三年におよぶ逃亡・流浪の日々を大内氏に支えられておくっている。その見返りであろうか、永正13年（1516）には遣明船に関する大内氏の特権を認めている<sup>20</sup>。

策彦は初渡のさ中、何度も宗忠の夢をみている<sup>21</sup>。

思うに策彦・義植はもとより大内義隆を経済的に支えたのは、吉田宗忠ではなかろうか。宗忠が資金を提供したからこそ、その子・宗桂は遣明船に乗り込んだのではないだろうか。

宗桂自身は、「天文元年（1532）家を継ぐ。万松院義晴につかえ、侍医たり」とある。

つまり宗桂は21歳で宗忠の家督を継ぎ、第12代義晴（将軍在位は1521-1546）の侍医をつとめている。宗桂が大内氏の典医であった、とする確証は現在のところ見当たらない。

## 7. 大航海時代の幕開け・ザビエルの開教

さて、策彦らが明の嘉靖帝（世宗。在位1524-1566）に謁見するという、再渡の最大イベントをおこなっていたちょうどその頃。

1549年（天文18年）8月、イエズス会のフランシスコ・ザビエルは、コスメ・デ・トルレス神父、ファン・フェルナンデス修道士らとともに鹿児島に来着した。

鹿児島を選んだのは、ポルトガル領であったインドのゴアで入信した鹿児島出身の武士ヤジロウ（アンジロウ）の勧めによるものとされている。

ヤジロウのほか、中国で入信した日本人デオゴ（永禄2年ビレラ神父とともに入洛）の例

にみられるように、いわゆる大航海時代が始まった天文年間には、交易のために多くの日本人や中国人が海外に渡航しており、なかには、ザビエルによる日本開教以前にキリスト教に出会い、海外で入信する者がいた<sup>22</sup>ことに注意しておきたい。

わずかではあるが、ゴアで入信した中国人が交易のために山口に駐在し、若き宗桂に中国語を教え、さらにはキリスト教入信を勧めた可能性がないわけではない。

ザビエルー一行は、当初はポルトガルとの交易を横目でいらんでいた領主島津貴久に布教の許可を得たものの、その後は仏僧の反対で布教を禁止され、一年以上を鹿児島で過ごした。

## 8. 大内文化と大内義隆の死

天文 19 年（1550）11 月上旬、上洛途上のザビエルは、周防国山口に立ち寄った。

当時山口は領主大内氏すなわち大内政弘（1446-1495）・義興（1477-1528）・義隆（1507-1551）の三代に渡って、朝鮮や中国との交易で栄え、大内文化と称される文化が花開いていた。大内義隆は京都から山口への「遷都」さえも企図し、多くの公家や職人が山口に下向している<sup>23</sup>。

山口から京都にのぼったものの、天皇や将軍に会えなかったザビエルは、天皇や将軍のために用意していた望遠鏡・時計・眼鏡・鏡などの品を義隆に献上し、布教の許可を得て、山口にわが国初の教会堂を開いた。ザビエルの布教により入信者は 500 人を数えたという。

ただ、天文 20 年 9 月 1 日（1551.9.30）、全盛を誇った大内義隆は、陶隆房（のち晴賢）の謀反で自害し、山口は争乱の渦に巻き込まれる。

ザビエルは、戦乱の山口での宣教をトルレス神父とフェルナンデス修道士にまかせ、豊後での二か月間の布教を経て、1551 年 11 月、イエズス会東洋布教の拠点であったインドのゴアに向った。

## 9. ビレラ神父の上洛

ザビエルが日本を去って 5 年後の弘治 2 年（1556）、ビレラ神父ら数人の神父・修道士が日本に新着した。彼らは平戸や島原で日本語および布教の訓練を受けた。

1559 年（永禄 2 年）山口での布教をまかされていたトルレス神父は、身体強健で日本語に熟達したビレラ神父に、ザビエルの宿願であった京畿開教の大任を託し、ミヤコ（京都）に派遣することを決断する。永禄 2 年 8 月 4 日（1559.9.5）ビレラ神父は盲目のロレンソ修道士、同宿ダミアン、中国でキリシタンになったデオゴの 3 人の日本人とともに海路、豊後（府内）の萩の浜から和泉の堺を目指した。

かくして、「大内氏の典医」とされ、「山口王の死（天文 19 年（1550）9 月）に際して、国を追われた」とされるパウロ・エサンは、堺の町で旧知のビレラ神父に出会い、建仁寺永源庵主への紹介状を書くわけである。

パウロに馬子（まご）の周旋を命じてから、師父等の一行は堺の町に別れを告げた。とフロイスは書いている<sup>24</sup>。馬子の斡旋をしたのであるから、パウロ・エサンにはそれなり

の財力があったのであろう。

入洛を果たしたビレラ神父は将軍足利義輝と謁見した。

当時公方様（足利義輝）は、御殿がなくて、妙覚寺〔姉崎注：当時堀川二条〕に住んでいたため、ビレラの小屋、玉蔵町からは僅かに数町（数百メートル）の距離であった。

パウロ・エサンの紹介状は功を奏した。永源庵主が案内した結果、ビレラは、公方様から布教の許可を得ることができ、見すばらしい小屋の前に、その旨を記した「制札（たてふだ）」を立てた。

以来、何度も迫害があったものの、京都・大阪・九州はもとより全国各地での布教は進展し、日本のキリシタンは、1601年（慶長6年）当時で約30万人、ザビエル渡来の1549年以降1630年代初期までの80年間に、およそ76万人を数えるにいたったのである<sup>25</sup>。

## 9. シルヴァ修道士の書簡

ザビエルの去った1年後の1552年（天文21年）にドワルテ・ダ・シルヴァ修道士が、ザビエルと入れ替わりに日本に来航し、山口のトルレス神父のもとで布教に努めることとなった。次に、シルヴァ修道士の書簡に登場する「パウロ」を紹介しよう。

1555年9月20日（弘治元年9月5日）、山口のトルレス神父のもとにいたシルヴァ修道士が、ゴアの修道士たちにおくった書簡<sup>26</sup>。

又五十歳を超えたる男子一人キリシタンとなりたり。

彼は日本の教えは皆空しきものなることを知り、何も崇拜せざりしが、高名なる人にして文章を能くし名をパウロといえり。

此の人は其の妻がデウスの教えを奉じて善き人となりたるを見てキリシタンとなる心を起し、キリシタンとなりたる後、デウスの事及び祈祷を学び、珠数とこれに付くる十字架を己の手を以て作り、日本語にて書きたる宗教書を悉く写して之を読み、了解せんため、しばしば住院に來りてパードレに質問せり。

彼は日本人キリシタンを激励し、多数の異教徒にデウスの教えを奉ぜしめ、**彼に劣らざる才能ある兄弟一人**、その他多数の親戚及び知友をキリシタンとなしたり。

彼は徳高く謙遜なるがため諸人より賞賛せられ、又日本語にて**数種の書を編纂**し、我等の主のために大いに尽し、デウスの御恵により彼の書物は諸人を満足せしめたり。

この書簡で紹介された「五十歳を超えた」「高名なる人にして文章を能くし」「徳高く謙遜なる」パウロは、「日本語にて数種の書を編纂」していることから、真つ先に「サントスの御作業の内抜書」のなかの四編の翻訳に関わった養方パウロではないかと考えられる<sup>27</sup>。

しかし、養方パウロは、この書簡が発信された1555年時点ではキリスト教信者ではなく、5年後の永禄3年（1560）に京都で受洗<sup>28</sup>しており、このパウロではありえない。

シルヴァ修道士は、日本に渡来後、日本語文法及び日葡辞書を編集している<sup>29</sup>。おそらく養方パウロとその子・ビセンテ洞院をよく知っていたと考えられる。

シルヴァ修道士は、「別のパウロ」と養方パウロとを混同したのであろう。

「彼に劣らざる才能ある兄弟一人、その他多数の親戚及び知友をキリシタン」に入信させた、この「別のパウロ」がパウロ意安すなわち書簡発信当時 44 歳の吉田宗桂と考えられることは、本稿の最後に述べる。

## 10. パウロと呼ばれた 3 人の日本人医師

姉崎正治『切支丹伝道の興廢』は、パウロとよばれた 3 人の日本人医師がいたことを示している<sup>30</sup>。

その第一者は、開教後二年、トルレスが山口にいた時、そこで信者になった仏僧の一人、**教善パウロ**は、仏学の外に医術に通じ、山口の動乱を避難して豊後に行き、アルメイダの病院を助けた。パウロ教善と同行したトメ内田父子二人も病院で働いたが、元来医者であったや否や不明である。

之に次いで山口で信徒になった**パウロ・エサン**は、大内氏の医師であったが、動乱に「主人に殉死した」（フロイスは「国を追われた」）。日本歴史にあらわれている吉田意安でないかと思われる。

永禄 8 年（1565）京都でアルメイダの感化を受けた医者は、**パウロ・ヨホケン**（養方軒）とその子ビセンテ・ホイン（洞院）と伝えている。その父は若狭の生まれであって、京都で父子医者をしていたが、信者になって、後堺に移り、又豊後に来て、府内や臼杵でアルメイダを助けていたという。

ルイス・デ・アルメイダ（1525-1583）は、外科医兼商人として日本に渡来後、イエズス会に入会している。弘治 2 年（1556 年）、ドン・フランシスコ大友宗麟の支援を受け、豊後（府内）に病院を設立。外科医として治療にあたり、多くの信者を獲得した。

教善パウロと養方パウロは、「アルメイダの病院を助けた」「アルメイダを助けた」とある。パウロ・エサンも下のようには有馬領の布教を進めるアルメイダを助けたとされる<sup>31</sup>。

フロイス『日本史』にあらわれた最後のパウロ・エサンに関する記述を見てみよう<sup>32</sup>。

なお、この記事は永禄 6 年 5 月中旬（1563.6.初旬）に日本初のキリシタン大名となった大村純忠が受洗する直前の出来事としてフロイスは記述している<sup>33</sup>。

最初伊留満（アルメイダ）は、山口産、当地（口ノ津）にて医師を開業する貴人**パウロ恵山**と云者の招待を受けた。八、九日の後に、彼は又或るもっと居心地よき家に招待されたが、それは後にジョアンの霊名にてこの地切つての堅固なキリシタンとなった。

先述したように、『言継卿記』には、宗桂が永禄 6 年（1563）7 月 15 日と永禄 13 年（1570）正月 20 日に京都で過ごしていた、という記事がある。上のパウロ・エサン（恵山）を宗桂とみなすことには、不可能とはいき切れないが、相当無理があると言わざるを得ない。

3 人のパウロの経歴を見比べると、教善パウロとパウロ・エサン（恵山）は、山口の動乱からのがれ、豊後ないし肥前口ノ津に移動している。教善パウロと養方軒パウロは、どちらも堺に居たことがある。

言いかえれば、3 人の経歴には、日本人医師という共通点のほか、よく似た部分とそうで

ない部分が混在している。シルヴァ修道士も『日本史』をあらわしたフロイスも、姉崎博士も、3人を混同していた可能性は高いのではないだろうか。

姉崎博士が「日本名エサン（恵山）」とした「山口から来て肥前口ノ津に住んでいた医者パウロ」は教善パウロだったのではないだろうか。

## 11. 宗桂の弟・曲庵と茶の湯

シルヴァ修道士の書簡に登場するパウロは、「珠数とこれに付くる十字架を己の手を以て作」り、「彼に劣らざる才能ある兄弟一人」および「その他多数の親戚及び知友」をキリスト教に入信させている。

旧稿「時慶記のキリシタン(2)曲庵の謎」および「時慶記のキリシタン(3)曲庵と呼ばれた人々」では、宗桂の弟に「曲庵」と呼ばれる人物がおり、時慶が大洪水のさ中、大阪の「曲庵」に宿泊したことから、曲庵はキリシタンの教会ないし集会所、かつ、そこに集う信徒の代表者を意味するのではないかと推論した。

この「新在家の曲庵」は、天正11年（1583）8月-10月に、山科言経の求めに応じて医学書『全九集』の書写をおこない、天正15年2月28日（1587.4.5）の日曜日には「大進参会」を催し、同年4月中旬には花細工（結び花・糸を花の形に結んだ装飾品）を『時慶記』の記主・西洞院時慶に手伝ってもらい、慶長元年（1591）9月16日に死亡している。

すなわち、宗桂には、珠数や十字架をみずから作る器用さと、医学書の書写をおこなえる才能をもつ兄弟一人がいた。むしろこのことだけを根拠にして、シルヴァの書簡が紹介しているパウロを宗桂とみなすのは、牽強付会と言わざるをえない。

ただ、曲庵は、キリシタンと深いかわりのある茶の湯をたしなむ茶人であったことを次に述べよう。

## 12. 曲庵は茶人として名を残している

『寛政重修諸家譜』巻427では、宗桂のすぐ下の弟・光茂（六郎左衛門）のさらに弟として、寿筠（じゅいん）の名をあげ、「曲庵。出家して京師龍安寺の養花院の住職となる」と記されている。

旧稿では見落としたが、じつは、「曲庵」や寿筠をあらわすと思われる「養花曲庵」は、堺の豪商・天王寺屋の主人であり茶人でもある津田宗及が記した『津田宗及茶湯日記』<sup>34</sup>（松山米太郎評注・昭和12年）に登場している。

『津田宗及茶湯日記』他会篇の総目録によれば、曲庵を亭主とする茶会、曲庵会は3回（天正5.10.5, 天正8.1.12, 天正10.2.1）開かれ、養花曲庵の養花曲庵会は7回（元龜2.2.24, 天正4.3.22, 天正5.5.3, 天正5.11.19, 天正6.10.8, 天正7.2.19, 天正11.3.23）を数える。

同様に、「曲庵」「養花曲庵」は、天正15年（1587）10月1日に秀吉が京都北野神社でおこなった大茶会の記録である『北野大茶湯之記』<sup>35</sup>と、千利休の高弟・山上（やまのうえ）宗二が天正16年（1588）に記した茶道具の書『山上宗二記』<sup>36</sup>にもあらわれている。



曲庵および養花曲庵（同一人物である可能性もある）は、元龜・天正の時代、茶人として世に知られていたのである<sup>37</sup>。

### 13. 茶の湯とキリシタン

イエズス会の巡察師ヴァリニャーノが日本での宣教に当たって、日本の習俗を尊重する現地適応主義を採用したことはよく知られている。

1581年（天正9年）10月、ヴァリニャーノは『日本イエズス会士礼法指針』<sup>38</sup>を一日一夜で書きあげた。そのなかで、パードレ（神父）が客人を迎え入れるカザ（家）には、

玄関、茶の湯（飲み水に投げ入れる、ある草木の粉末）および座敷を持つように努めなければならない。

「玄関、茶の湯および座敷」という訳には、やや疑問が残るが、ヴァリニャーノが茶の湯をイエズス会士が心得るべき日本の習俗・礼法とみなしたことは明らかである。

キリシタンと推定できる、宗桂の弟・曲庵（および養花曲庵）は、その晩年において、有名な茶人となった。

書簡にあらわれた「パウロ」が仮に宗桂であったとすれば、シルヴァ修道士は「彼に劣らざる才能ある兄弟一人」と記した時、若き曲庵を思い浮かべていたのではないだろうか。

### 14. 結論として

以上の考察から、「永禄2年8月頃にビレラ神父が堺で出会ったパウロ・エサンは、パウロ意安すなわちキリシタンの吉田宗桂である」説は、大筋においてフロイス『日本史』や『入明記』『寛永諸家系図伝』に矛盾していないことがわかる。矛盾していないが、宗桂に関して日本側史料の語るところは、あまりにも少ない。

永禄6年5月頃に肥前口ノ津に姿をあらわしたパウロ・エサンと、同年7月15日に京都でお盆の蓮飯を山科言継から受け取った吉田宗桂は、別人であろう。

と言っても、2ヶ月で肥前から京都まで移動することは、不可能ではない。

今後、新たな史料の発見によって、姉崎説の是非は確定できるであろう。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 姉崎説はフロイス『日本史前篇』高市慶雄訳日本評論社昭和7年の第22章144pに受け継がれた。
- <sup>2</sup> 『寛永諸家系図伝』は寛永20年（1643）に完成。『角倉源流系図稿』は奥書によれば貞享4年（1687）に吉田光由の子・田中光玄が誌した。遅れて『寛政重修諸家譜』は文化9年（1812）に完成した。
- <sup>3</sup> 宗桂の生没年は『寛政重修諸家譜』巻427に依る。以下の吉田角倉家の人々の年齢や生没年も同様。
- <sup>4</sup> 『寛永諸家系図伝』第十五（続群書類従刊行会・平成6年）の宇多源氏吉田系には、佐々木秀義を筆頭とするもの（155p-163p）と、吉田徳春を筆頭とするもの（205p-207p）の2種類の系図がある。宗桂の伝記があるのは前者。
- <sup>5</sup> 李白に「人生在世不称意（人生は思うように生きられない）」「知足即為称意（知識を蓄えれば、意のままになる）」という詩がある。
- <sup>6</sup> 岡本真・須田牧子「宮内庁書陵部所蔵『策彦周良等往来雑記』」東京大学史料編纂所研究紀要（24）2014-3（102）に、寧波の文人、方仕の字が梅厓、号が雲冠道人と示されている。

- 7 鈴木学術財団編『大日本仏教全書第 73 巻史伝部 12』に久保田量遠による返り点付きの『策彦和尚入明記』が収められている。
- 8 梅崖の名は『入明記』の天文 8.7.21, 同 8.19, 天文 9.11.6, 天文 10.2.5, 同 2.3 に見える。
- 9 天龍寺妙智院などに残る書画に「称意」の二大字がある可能性はある。
- 10 牧田諦亮『策彦入明記の研究・下』法蔵館 1955. 39p. 牧田諦亮著作集第 5 巻に所収。
- 11 初渡の正使・湖心碩鼎の詩号は三脚。『続群書類従』巻 350 に「三脚稿」がある。従僧三英は「三」の字を碩鼎からもらった(偏諱を賜った)直弟子であろう。
- 12 『寛政重修諸家譜』巻 427 に「天文 19 年帰朝のとき多く医書を携え来る」とある。
- 13 牧田諦亮『策彦入明記の研究・下』法蔵館 1955. 97p.
- 14 『医方大成論』は元の孫允賢撰。我が国初の刊行医書とされる熊宗立(1409-1481)『医書大全』の風寒暑熱などの各門の「論」を抜き出したもの。宗桂のほか、道三一溪・道三玄朔が講義し、その聞き書き(医方大成論抄)を玄朔自身や宗桂の子・宗恂などがまとめたとされる。
- 15 『言継卿記』天文 19 年閏 5 月 3 日条に「自一条殿、今日医方大成論講尺有之、可參歟之由候仰下、午時參、嵯峨角蔵吉田子桂蔵主読之」とあり、同月 5・7・11・13・15・17・19・21・25・29 日に宗桂の講義がおこなわれた。記主の山科言継は 5 月 19 日と 29 日の 2 回欠席している。
- 16 現在天龍寺妙智院に残るのは、何度も書写を重ねた写本で、綴じ間違いの可能性はある。
- 17 『陰涼軒日録』や『実隆公記』にも桂蔵主が登場するが、いずれも宗桂が生まれる前の記事である。
- 18 牧田諦亮『策彦入明記の研究・下』法蔵館 1955. 80p.
- 19 林屋辰三郎『角倉了以とその子』星野書店昭和 19 年。
- 20 『堺市史・第 3 編』98p.
- 21 「夢吉田宗忠并室」(天文 9.2.16), 「齋後仮寝夢吉田宗忠」(天文 9.4.12) ほか、天文 9 年 5 月には 23 日 24 日と連続して宗忠(興三郎)の夢をみている。
- 22 ザビエル一行には、マヌエルという中国人、アマドールというインド人も含まれている。
- 23 トーマス・コンラン「大内義隆の遷都計画」山口県地方史研究(123 号別冊)2020-6.
- 24 フロイス『日本史前篇』(高市慶雄訳・日本評論社・昭和 7 年)第 23 章 146p.
- 25 五野井隆史『日本キリスト教史』吉川弘文館 1990 年 11-12p.
- 26 『耶蘇会士日本通信・豊後篇上巻』村上直次郎訳注、昭和 11 年 121-122p.
- 27 土井忠生「府内コレジオに於ける編述書と養方パウロ」広島大学・国文学攷(24)1960-11.
- 28 五野井隆史「イエズス会士によるキリスト教の宣教と慈悲の組」日本学士院紀要第 72 巻特別号.
- 29 フロイス『日本史前篇』第 9 章 510p.
- 30 姉崎正治『切支丹伝道の興廢』第 20 章 432p 「日本人信者中の医師」.
- 31 フロイス『日本史前篇』16 章。「1556 年(弘治 2 年)」.
- 32 フロイス『日本史前篇』44 章. 336p.
- 33 『切支丹伝道の興廢』第 6 章 96p は、フロイスのものとは若干異なる。「アルメイダの往来の外に、ダミヤンを始め二、三の同宿が此地(ロノ津)に留まり、且つ山口から来て高来に住んでいた医者パウロ(日本名エサン)も之を助け、ロノ津には間もなく四百の信者があり、教勢はずんずんと延びて行った」.
- 34 津田宗及は元龜 2 年 2 月 16 日に堺から入洛、24 日に「曲庵会」に参加、3 月 2 日に「曲庵方にて辻玄哉の信楽鬼桶」を「一覽」し、6 日に帰津している。「養花曲庵会」(天正 6.10.8, 天正 11.3.23), 「京曲庵会」(天正 8.1.12)に参加している。
- 35 『北野大茶湯之記』(千宗室等編『茶道古典全集第 6 巻』淡交新社 1958 に所収)の頭注に「養花曲庵。新在家の人。豊臣秀長(秀吉の異父弟)の茶堂(茶頭)」とあるが、根拠は不明。『時慶記』天正 15 年 9 月 30 日条に「北野茶屋共見物ニ行、各傍輩衆ノ所ヲ見廻也」とある。曲庵が茶屋を開いたかは不明。
- 36 『山上宗二記』も『茶道古典全集第 6 巻』1958 に所収。香炉・香合・天もく(茶碗)を「已上養花曲庵所持」、ソロリ・古銅無紋の花入を「紹鷗天下無双花入也。京施薬院并曲庵所持す。四方盆にすはる」などある。
- 37 『津田宗及茶湯日記』には初期のキリシタン(いわゆる古キリシタン)の茶会も多くある。高山右近(教名ジュスト。天正 5.12.9), 小西立佐(教名ジョーチン。天正 9.11.3, 天正 10.12.14), 池田丹後守(教名シメオン。天正 8.閏 3.12, 天正 8.12.16, 天正 9.11.10, 天正 10.10.8)のほか、薬師(くすし)道三すなわち道三一溪の「薬師道三会」は元龜 2 年から天正 11 年まで 5 回(元龜 2.2.20, 天正 1.9.18, 天正 3.7.12, 天正 4.2. (日付空白), 天正 11.3.18)開かれている。
- 38 A.ヴァリニャーノ著、矢沢利彦、筒井砂訳『日本イエズス会士礼法指針』キリシタン文化研究会 1970.